

令和6年度 文部科学省委託研究
「幼児教育の学び強化事業」

遊びにおける幼児の主体性と 教師の意図のバランスに関する研究



令和7年3月

国立大学法人 長崎大学教育学部附属幼稚園
協力：全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

本報告書は、文部科学省の「幼児教育の学び強化事業」の委託費による委託業務として長崎大学が実施した、令和6年度の調査研究の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承諾が必要です。



令和6年度 文部科学省委託研究
「幼児教育の学び強化事業」

遊びにおける幼児の主体性と
教師の意図のバランスに関する研究

令和7年3月

国立大学法人 長崎大学教育学部附属幼稚園
協力:全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

まえがき

秋の紅葉シーズン。登園時にきれいな色の落ち葉を拾ってきた年中A児。「A:見て!赤と黄色の葉っぱ。きれいでしょ。」「担任:とてもきれいな色だね。」「A:うん!朝、お母さんと見つけたの。」「担任:どこで見つけたの?」「A:幼稚園に来るときの道だよ。今日、みんなに話したい!」「担任:みんなに話してね。」この後、A児は降園前にとっても嬉しそうに落ち葉のことをみんなに伝えた。学級の子どもたちは「見たことある!」「僕も、幼稚園に来るとき見つけたよ。」「たくさん落ちてるもんね。」「明日、持ってくる!」とそれぞれが自分の思いを生き生きと口にしていた。その様子を見た担任は、A児以外の子どももきっと落ち葉を拾って持ってくるだろうと予想し、紅葉する「葉っぱの種類」や「色の変化」について載っている図鑑を広げて置いておいた。翌日の登園時に紅葉した落ち葉を拾ってきた子どもたちは、図鑑の写真と照らし合わせながら「この色だね。」「これ、ナンキンハゼっていうんだ。」「これはサクラ?」「この茶色はクヌギって書いてる。」とつぶやいていた。

本園は、令和3年度から「『したい 知りたい やってみよう』を育む環境構成と教師の援助」を研究主題に、幼児の主体性を育むための保育を研究してまいりました。上記は、子どもの興味や関心を担任が察知し、翌日子どもたちがさらに主体的に『したい 知りたい やってみよう』が実現できるように教師が環境を構成した一場面です。

今年度は、文部科学省「幼児教育の学び強化事業」において「教育課題に関する調査研究」の委託を受けることになりました。研究課題は、「遊びにおける幼児の主体性と教師の意図のバランスに関する研究」です。昨年度までの研究で、子どもの思いを大切にする保育と共に、教師のねらいや思いも大切にする保育が子どもの主体性を育む上で大切ではないかと感じるようになりました。

しかし、教師のねらいや思いを出しすぎて子どもの思いを誘導したり、教師主導で保育を展開したりすることは、主体性を育む保育とは言えません。逆に、子どもの興味や関心、思いや考えを優先するあまり教師が見守るだけだったり、任せっぱなしになったりすることもより良い保育とは言えません。このようなことから、子どもの思いと教師の思いが上手く絡み合ったとき、子どもの主体性を育むより良い保育が行えるのではないかと思います。

さらに、本委託調査研究を通して我々は、研究課題に関する教師の「悩み」や「迷い」に注目しました。幼児教育に限らず全ての教師は、子ども理解をベースに保育や授業を仕組んだり、指導や援助等を行ったりします。その中で、常に「悩み」や「迷い」を解決する方策を思案し、試行錯誤を繰り返しながらその都度ベストを尽くします。自力解決が難しい場合は、仲間達に相談しながらより良い方策を講じます。これら一連の流れを繰り返すことで、教師としての資質や力量が磨かれていきます。

本委託調査研究を通して得られた成果が、遊びにおける幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って行われるより良い保育につながり、全国の幼児教育・保育に携わる皆様のお役に立てることを願っております。

長崎大学教育学部附属幼稚園 園長 高田敏彦



第1章 幼児の主体性と保育者の意図のバランスについて



今こそ、こどもまんなか社会における幼児期の教育を振り返ろう
— 幼児の主体性と保育者の意図がバランスよく絡み合うという視点から —
(令和7年1月25日 熊本大学附属幼稚園幼児教育研究会 講演から一部抜粋)
※第1章において、「保育者」は幼稚園教諭・保育士・保育教諭等とする。

名古屋学芸大学 教授 津金 美智子

令和6年12月25日、文部科学大臣(臨時代理国務大臣)は中央教育審議会に、初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について諮問し、これからの時代にふさわしい学習指導要領の在り方(改訂)について検討を依頼しました。幼児教育においては、「幼保小の架け橋プログラム」の成果と課題を踏まえつつ、「環境を通して行う教育」が基本であることにも留意し、幼児教育と小学校教育との円滑な接続の改善について、また、設置者や施設類型を問わず幼児教育の質の向上を図ることが求められました。

こうした次期改訂に向け動き出そうとする今だからこそ、幼児教育が普遍的に基本としてきた「環境を通して行う教育」について再確認し、「こどもまんなか」社会において大事にすべき質の高い幼児期の教育活動とその改善に力を注ぐ必要があります。

環境を通して行う教育は、環境の中に教育的価値を含ませながら、幼児が自ら興味や関心をもって環境に取り組み、試行錯誤を経て、環境へのふさわしい関わり方を身に付けていくことを意図した教育です。

熊本大学教育学部附属幼稚園での子どもの姿から考えてみましょう。

右の写真は、子どもたちが「100円ショップごっこ」をしていた時の品物です。きれいな包装紙で折った「金魚」です。金魚を作る際、尾ひれの部分を切りますが、ここで売られている金魚は、どれも深く切り込みが入っています。金魚の体と2・3mmぐらいでしか、つながっていません。品物であれば、もう少し丈夫な方がよさそうな感じがしますが、どの金魚も同様です。「どうして、こんなに切り込むのか」不思議に思いながら、この組の保育室に入った瞬間、納得しました。保育室には水槽があり、なんと、その中には、尾ひれがヒラヒラしたあの品物と同じような金魚が泳いでいたからです。きっと、品物の金魚は、子どもたちにとって毎日世話をして親しんでいる「かけがえのない金魚」だったのでしょ。だから、この金魚の尾ひれにするには深い切り込みが必要だったのです。子どもにとって、単に「品物」ではなく、まさに、子どもと環境との関わりから生まれた「命を吹き込まれた金魚」であったのです。

その後、ショップの様子を見ていると、さらに、感動する姿に出会いました。この金魚を客に渡す際、両掌でそっと包み込みながら、「ひれを大切に扱ってくださいね」と心を込めて言葉をかけ、大事に渡す姿がありました。



さらに、参観している私が注文した際は、次のような袋に入れてくれました。手で提げられるように、切り紙の仕方で半分に折ってくり抜かれた穴があり、さらに、その上部は持ちやすいように穴に沿って丸く切られています。

私は園に着いた際、子どもたちに「どこから来たの」と聞かれたことを思い出しました。新幹線の『のぞみ』と『さくら』を乗り継いできたことを伝えると、子どもたちは「へえ、遠い所から来たんだね」と言いました。地図の概念もない子どもたちにも関わらず、私の言葉を聞いて「遠い、距離が長い、時間がかかる」といった感覚を働かせています。だから、遠くても大切に扱えるように、これまでに培った技能を生かして袋を作ってくれたのだと分かり感激しました。



まさに、幼児期の教育は「環境を通した教育」であることが分かります。それ故、保育者は教育課程や全体的な計画に基づき、子ども一人一人の発達の過程・道筋を見通し、かつ、幼児期の教育における見方・考え方を十分に生かしながら、子どもの主体性が発揮されるような教育環境を創造する必要があります。

つまり子どもの主体性と教師の意図がバランスよく絡み合うことで成り立つ教育です。

ここに、他の学校種とは違う保育者の専門性が限りなく問われます。

それは幼児期が、子ども一人一人の興味や関心に応じ、生活や遊びの中で直接的・具体的な体験などを通じ、子どもなりのやり方やペースで考えたり、様々な問題を解決しようとしたりして発達していく時期だからです。子ども自らが周囲の環境に働き掛けて様々な活動や遊びを生み出し、子どもの意識や必要感を伴った連続性のある保育を行うようにすることが重要だからです。もちろん、「幼稚園教育要領」が教育課程の基準ですが、教科書のない毎日の保育の展開は、子どもの興味や関心等をどのように読み取り、保育者の願いや意図とどのように絡ませていくか、といった保育の構想が求められます。

それは、保育者主導の一方向的な保育の展開ではなく、子どもの立場に立った保育の展開です。活動の主体は子ども、保育者は活動が生まれやすく展開しやすいように意図をもって環境(物的・人的・空間的な環境)を構成していかなければなりません。

それには目の前の子どもを理解することから始まり、指導計画を立てる必要があります。しかし、この計画は、あくまでも仮説であり、計画した環境に子どもがどのように関わっていくのかについては、子どもに委ねる必要もあります。また、予想外の子どもの発想、偶然のできごと、或いは突発的な状況に沿っていくことも求められます。子どもの言動は瞬時に変化していきますので、常に、柔軟に保育を展開し、環境を子どもと共に再構成していく必要があります。こうしたことは、計画性と相反するよう思われますが、計画し見通しをもっているからこそ、目の前の様子をゆったりと余裕をもって受け止めたり、その状況を予想して準備しておいた教材や場をタイムリーに用意したりすることも可能になります。時には、子どもの思いとのすれ違いに戸惑うこともありますが、どのように折り合いをつけるか模索する中で、子どもとの関係性も深まることもあります。

こうした子どもの主体性と教師の意図がバランスよく絡み合うことで、子どもは遊びを通じて様々なことを自分の中に取り込み、学ぶことの楽しさを知り、積極的にもの・人・できごとに関わろうとします。この過程で、子どもは自分なりの発想を生かし実現しようと思いを巡らせたり主体的に取り組んだりして、無自覚ながらも創造的な思考と主体的な生活態度の基礎を培い、小学校教育へとつながる資質・能力を身に付けていくこととなります。



第2章 本研究の目的と方法

第1節 研究の背景

幼稚園教育要領解説には、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、…、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」とあり、「このような環境を通して行う教育は、幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つものである。」と示されている。

これを受けて全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会九州ブロックの園長会で話し合ったところ、幼児の主体性を重んじるがあまりただ遊ばせるだけの放任や幼児への安全面等の配慮から教師の一方的な指導による保育、小学校教育への接続を意識した早期教育的な教師主体の保育が展開されている幼児教育・保育施設もあるという意見が出た。さらに、各園に日頃の保育を行う上でバランスに関する状況を確認したところ、「教師の思いや願いが先行していないだろうか」「教師主導の一方的な保育になっているのではないか」「教師が意図する保育に躊躇してしまっていないか」「ただ遊ばせるだけになっていないだろうか」など、「悩み」や「迷い」があることが分かった。

このような「悩み」や「迷い」は、全国の附属幼稚園の教師も同じようにあるのではないかと考え、そうであれば一緒に考えていけば皆にとってより良い学びになるのではないかと考え、テーマを決定した。

また、附属幼稚園以外の幼児教育・保育施設の教師等にとっても「悩み」や「迷い」を共感、共有できる大変興味深く意義あるテーマであると考えた。

なお、本報告書では、幼稚園における事例を収集し分析しているため、「教師」「教育」としているが、保育所、認定こども園等の先生方にも大いに参考にさせていただきたい資料である。

第2節 研究の目的

幼児の主体性を育む教師の意図ある保育の実践をする上で生じた「悩み」や「迷い」を検討することで、幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合ってよりよい教育になるのではないかと考えた。

そこで本研究では、以下の目的で研究に取り組んだ。

- 1 教師は、「幼児の主体性と教師の意図のバランスに悩んだ」事例について、どのような「悩み」や「迷い」をもっているのか、またその「悩み」や「迷い」がなぜ生じるのかを事例を分析することを通して明らかにする。
- 2 分析の結果をもとに、「幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つ教育」とは、どういう教育なのかを検討する。よりよい保育をめざすための参考資料として活用を促す。

幼児教育・保育施設で全国的な課題ともいえる「幼児の主体性と教師の意図のバランス」に着目して研究を進めることは、幼児期にふさわしい教育を広く啓発することに寄与すると考える。

第3節 研究の方法

1. 事例提供の対象園

全国国立大学附属幼稚園48園

2. 事例の収集期間

令和6年7月31日から8月31日まで

3. 事例の様式及び記載方法

幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合う教育に悩んだ事例を収集した。事例の様式は図1に示す通りであり、各項目への記載については以下のとおりとした。

タイトル

教師の心のつぶやき等、教師の悩みが伝わるように記載した。

本事例について

遊びが始まった経緯、遊びのねらいや教師の意図、事例に登場する幼児の普段の様子や好きな遊び、これまでの経験等を記載した。

事例

幼児の言葉や表情等を中心に事実のみを記載した。

幼児の標記は登場する順に記載した。

幼児の主体性が見られた姿には黄色、教師の意図が表れているところには青色のマークで色を付け、通し番号を付けた。

幼児の主体性

幼児の言動に関する振り返りや考察を記載した。

教師の意図

援助や環境構成の理由、教師の願いや思い、心の声や悩み等を記載した。

幼児の主体性をどう捉えたか【幼児の姿】

幼児の主体性の発揮につながった要因やどんな主体性が見られたか、主体性をどう汲み取ったか等、幼児の姿を明確に記載した。

教師は出すぎ?出なさすぎ?【課題・分析】

事例作成者自身で課題を明確にした上で分析した内容を記載した。

(例) 幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合う教育について、悩んだこと、迷ったことなどを、理由を示しながら記載したり、教師の働きかけの質について出るタイミングや接し方を記載したりした。

これからどうしたい?【改善】

改善策を記載した。

(例) 幼児の思いや願い、教師のねらいを踏まえた援助や環境構成について理由を含めて、今後の教育にどう生かすかを記載した。

(図1) 事例様式

「タイトル」		
【〇年保育 〇歳児 〇月〇〇】		園名：〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇園 作成者：担任（小学校〇年 幼稚園〇年目）
本事例について【ねらい等】		
事例	幼児の主体性について	教師の意図について
幼児の主体性をどう捉えたか【幼児の姿】		
教師は出すぎ？出なさすぎ？【課題・分析】		
これからどうしたい？【改善】		

4. 事例分析の方法

事例を学年、場面やパターン、キーワードごとにまとめ、そこから読み取れることを考察した。キーワードについては、バランスに関する悩みや迷いの背景に着目しながら読み取り、分析をした。



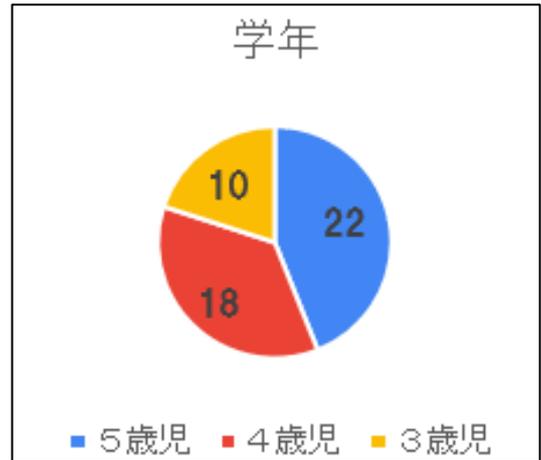
第3章 結果と考察

第1節 どのように悩み、迷っているのか

(1) 学年による悩みや迷いの特徴

今回の調査研究で、全国から50の事例が集まった。学年別の内訳は、5歳児が22事例、4歳児が18事例、3歳児が10事例だった。

3歳児の事例では、初めての集団での生活や慣れないことへの挑戦などにおいて、自分がしたいことをしたい幼児や新しいことへの不安感がある幼児と、幼児に何とか経験してほしいと願う教師の間でバランスを意識する事例が多かった。教師が経験させたいと願うことの多くは、季節が限られている遊びや次の学年を見据えたときに経験してほしい活動だった。また、幼児はしたいと主体性を発揮しているが、安全面や生命尊重の視点から教師がしないでほしいと思う事例もあった。初めての園生活で、教師が意図をもって環境を整えることが多いからこそ、教師の思いが先行してしまったと感じるのではないだろうか。



4歳児の事例では、活動の場面がいろいろと見られたが、自分がしたいことをしたい幼児と、幼児に寄り添いながら保育を進める教師の間でバランスを意識する事例が多かった。その中でも、幼児の思いが読み取りにくいことで起こる悩みや迷いが多く、幼児の思いの読み取りが十分でなかったり、教師のねらいや援助の方向性がはっきりしなかったり、幼児の思いと教師の思いにずれがあるときに悩みや迷いが生じるのではないかと考えられる。幼児たちは、イメージは膨らんでいるものの、それを言葉で表したり共有したりすることに難しさがある。そのため、教師が環境を準備したり援助を試みたり、実際にやってみたりしながら幼児の思いに寄り添おうとしていくことが求められていくのではないかと考えられる。また、成功体験をしてほしいと教師が願うばかりに幼児の思いと教師の思いにずれが生じてしまう事例もあった。幼児がしたいことがはっきりしてくるからこそ、教師の思いとずれが生じたり、思いが先行してしまったりすることで、バランスの悩みが生じるのではないだろうか。

5歳児の事例では、様々な場面で教師の意図が強く出すぎたときにバランスを意識する事例が多かった。教師の意図が強く出すぎる場面をまとめていくと、次の四つのキーワードが出てきた。一つ目は、「発展」である。遊びをもっと発展させてほしいという教師の意図が強く出すぎたときにバランスを意識したという事例があった。二つ目は、「全員」である。学級全員でしてほしい、全員に経験してほしいという教師の意図が強く出すぎた場面でバランスを意識している事例もあった。三つ目は、「行事」である。運動会などの大きな行事に向けた取組の中で、主体性をもって取り組んでほしいなどの教師の思いが強く出すぎた場面で悩みや迷いが感じられた。四つ目は、「最高学年」である。5歳児として、最高学年としての姿を教師が追い求めているときにバランスを意識するのではないだろうか。また、この四つの視点はそれぞれが結び付き合っている。さらに、5歳児になると、教師の意図に気付いているのではないかと考えられる事例が多かった。そのため、

幼児が教師の意図を汲んで、自分の思いとは少し異なっても、ひとまず遊びを展開することがあると考えられる。運動会などの行事や年下の友達との関わりなど、幼児がやりたいと思ったことではない場合においても幼児がひとまず教師の思いを汲む構図の中で、バランスに悩んだり迷ったりすることもあるのではないかと考えた。こうした背景があるため、他の学年よりも教師がバランスを意識しやすくなり、5歳児の事例が多く寄せられたのではないだろうか。

学年別の遊びの違いの例として、ごっこ遊びの場面を挙げて考察してみた。ごっこ遊びの場面で悩みや迷いの生じる場面を見てみると、3歳児はこれまでの経験等をもとになりきったり、教師の真似をして遊んだりすることが多く、幼児と教師の中でイメージがずれることは少ないが、4歳児になると自分だけの想像を膨らませ、イメージの世界が広がっていく中で、教師とイメージをすり合わせることに難しさがあり、教師がイメージを十分に理解できずにいるときに悩んだり迷ったりするのではないだろうか。5歳児は、自分のイメージを友達や教師に伝えながら遊び、教師もイメージを合わせようとしていくが、幼児への願いが強くなりすぎてしまい、悩みや迷いが生じるのではないかと考えた。このように、同じごっこ遊びでも、学年によって悩むポイントが異なるということが分かった。

(2) 遊び・活動による悩みや迷いの特徴

集まった事例を活動場面やパターンごとにまとめた中で多かったものとしては、「ごっこ遊び」が14事例、「自然との関わり」や「製作遊び」が7事例、「運動会に向けた取組」が5事例、「話合いの場面」や「学級全体で行う活動」、「砂泥遊び」がそれぞれ4事例だった。他には、「友達との関わり」や「水遊び」、「異年齢交流」などの事例があった。イメージを共有し合うことが求められるごっこ遊びや製作遊び、教師からの投げかけによって始まる運動会に向けた取組や話合い、学級全体で行う活動の場面で、バランスを意識しやすいのではないかと推察される。

「ごっこ遊び」では、教師が幼児の遊びを発展させようと環境を整えたり、援助をしたりする中で、教師の思いが強くなりすぎたり、幼児の思いを十分に捉えることができなかつたりして、幼児と教師の間で思いやイメージのずれが生じてしまった事例が多く見られた。幼児の思いに寄り添い、イメージを共有しようとする教師の姿からは、一見すると幼児のしたいことと教師のしてほしいことが同じ方向を向いているようにも見える。しかし、幼児が楽しさを感じているその先を教師が求めることによって、悩みや迷いが生じるのではないだろうか。幼児が楽しいと感じているところはどこか、その楽しさを十分に味わうことができているかを見極めることが教師に求められると考えられる。

「自然との関わり」では、教師の「失敗してほしくない」という思いや「生命を大切に扱ってほしい」という思いが強くなってしまったときにバランスを意識したという事例があった。植物や生き物は思い通りにはならないことが分かっていたり、命の尊さを感じてほしいという思いがあつたりするからこそ生じる悩みや迷いではないかと考えられる。教育を行う上では、幼児の思いを大切にしたい。一方で、たくさん失敗したり命を粗末に扱ったりしていいわけではない。教育の中で自然を扱うときの難しさが、バランスの悩みにもつながっているのだろうか。

「製作遊び」では、幼児の思いから始まる製作遊びよりも教師からの投げかけによって始まる製作遊びでバランスを意識しやすいことが明らかになった。教師からの投げかけによって始まる製作遊びは、幼児の思

いから始まるものに比べ、完成品のイメージが教師の中に既にあると考えられる。教師のそのイメージに近付けたいという思い、教師がねらいをもって準備した素材を使って作ってほしいという思いが悩みや迷いにつながってしまうのではないだろうか。

「運動会に向けた取組」について、運動会は、たくさんの人が幼児たちの様子を見たり、幼児の姿から園の様子をうかがったりすることのできる行事である。また、幼児の思いから始まる遊びよりも教師の投げかけによって始まる遊びや教師が主になって遊びを進めることが多い行事ではないかと考えられる。そのような行事に向けての取組の中では、教師がいろいろな焦りを抱えながら幼児と向き合うことも多々あるだろう。運動会などの園全体の様子が見られる行事では、教師の思いが先行してしまうと感ずるがゆえにバランスに悩むのではないだろうか。

「話合いの場面」は、教師からの投げかけによって始まることが多い場面である。幼児の必要感から始まる話合いでは、教師が幼児の思いを聞いて、幼児に寄り添おうとするため、バランスの悩みもあまりないと思われるが、教師のねらいに沿った幼児の姿を追い求めようとするときに開かれる話合いの場面では、バランスを意識しやすくなるのではないだろうか。

「学級全体で行う活動」においても、教師からの投げかけによって始まる遊びや活動を提案する際に悩んだ事例が見られた。自分の好きな遊びをしたいという幼児の思いを理解しながらも、みんなと一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしい、小さなグループでは味わえない集団での遊びの楽しさや醍醐味を感じてほしいという教師の願いがあるからこそ、悩んだり迷ったりするのではないだろうか。学級全体で行う活動の場面で悩んだという事例からは、「幼児の主体性を尊重したい。でも今はみんなと一緒に遊んでほしい」というような教師の切実な思いが感じられた。

「砂泥遊び」でも、「ごっこ遊び」と同様にイメージの共有が求められる。イメージがうまく共有できていなかったり、幼児同士のイメージを共有させようと教師が援助したりする中で、悩んだり迷ったりすると考えられる。

今回集まった事例の中には、教師からの投げかけによって始まる遊び、幼児の思いから始まる遊びのどちらも見られた。バランスを意識するパターンとして、教師からの投げかけによって始まる場合が多いのではないかと想定していたが、幼児の思いから始まる場合でも悩んだり迷ったりすることがあることが分かった。幼児と教師との間でイメージや思いのずれがあったり、幼児が楽しさを感じていることの先を教師が求めたりするときに悩んだり迷ったりすることがあるようだ。以上のことから、遊びの場面やパターンによっても悩むポイントが異なり、その遊び特有の悩みがあるということが分かった。

第2節 なぜ、悩み、迷うのか：悩みや迷いの原因、悩みや迷いに共通して見出されたキーワード

集まった50の事例の中の「教師は出すすぎ？出なさすぎ？【課題・分析】」欄を中心に読み取り、「幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つ教育」に関する悩みや迷いについて共通して出てくる言葉や繰り返し出てくる言葉を探ってみた。

教師が出すぎた、環境構成や教師の援助をしすぎてしまったと捉えた瞬間があった事例からは、多くの言葉が出てきたが、その中から3つのキーワードを取り出せた。

まず、一つ目は「不安」や「焦り」である。保育の中で不安や焦りを感じたときに、バランスに悩んだと感じた事例があった。不安や焦りの背景としては、時間のなさや行事への責任感、幼児に悲しい思いをさせたくないという思いなどが挙げられていた。幼児に体験してほしい、成功してほしい、達成感や充実感を味わってほしいと願う教師の思いが、悩みや迷いを生じさせているのではないかと考えられる。

二つ目は、「ずれ」や「食い違い」である。幼児の思いと教師の思いにずれがあった、思いの食い違いがあったという事例がいくつかあった。また、その思いのずれの背景としては、遊びのイメージをすり合わせる事ができなかったこと、幼児の思いを捉えることができなかったこと、教師が一方向的に援助をしてしまったことなどが挙げられていた。イメージや思いなどのはっきりと捉えることが難しいものをどのように捉えていくかが保育の難しさである。

三つ目は、「先回り」や「思いや願いの先行」である。教師が先回りして環境構成をしたり、思いや願いが先行するあまり援助をしすぎたりしてしまったという事例があった。教師が先回りをしたり、思いや願いが先行したりしたことで、幼児が当初描いていた遊びへのイメージと離れてしまい、幼児の遊びへの意欲や「やりたい」という気持ちがなくなったり、幼児の自己決定の場がなくなったりしたという課題が見られた。幼児に、その遊びの楽しさを味わってほしい、もっと遊びを楽しんでほしいと願う教師の思いが、悩みや迷いを生じさせているのではないかと考えられる。

さらに、教師が出すぎたと捉えた事例においては、「意図、思い、気持ち、願いが強く出すぎ」、「思いを押し付けすぎ」、「引っぱりすぎ」、「思いを全面に出しすぎ」といった振り返りが、多くなされていた。この類のキーワードは特に多く挙げられていた。その背景としては、ねらいを追い求めすぎたこと、幼児を導こうとしすぎたこと、幼児への期待、経験を重ねてほしいという教師の思い、幼児の思いや満足感などを捉えることができなかったこと、時間のなさ、安全面への考慮などがあった。悩みの種は様々なところに転がっていると考えられる。また、教師が思いを強く出すぎたために、幼児が教師の思いを感じ取ってしまったのではないかと、幼児が気持ちを抑えてしまったのではないかと、大人の顔色を伺っていたのではないかなどと分析している事例もあった。教師が幼児の思いを推し量ろうとするのと同様に、幼児もまた、教師の思いを汲み取ろうとしているのではないかと。他にも、「期待」、「無理にさせず」、「先入観」、「こだわり」などの言葉も見られた。

教師が出なすぎた、あるいは、環境構成や教師の援助が不十分だったと捉えた瞬間があった事例においては、次の2つが挙げられた。一つ目は「発信の待ちすぎ」、二つ目は「見守りすぎ」である。

幼児自らが発する言葉、伝えようとする思い、表現しようとしていることを「待ちたい」という思いがバランスの悩みにつながったのではないかと考えられる。これは、幼児の主体性を尊重しているからこそ生じる迷いであると考えられる。

また、「幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つ教育」に関して、共通する悩みや迷いの原因を探ってみた。悩みや迷いの原因として考えられたのは、「意図やねらいが曖昧」であるということである。教師の意図やねらいが曖昧だったために、教師の関わりが不十分になってしまい、どのように関わるとよかったのだろうかという悩みや迷いが生じてしまったと考えられる。そして、「意図やねらいが曖昧」であるということは、幼児理解が十分でないということに言い換えられるのではないだろうか。

以上のことから、「幼児の主体性と教師の意図のバランス」については、どの教師も悩みや迷いをもっていていること、また、悩みや迷いには様々な背景や原因があることが分かった。



第4章 まとめ

第1節 研究の成果「“バランスをとる”ではなく“バランスよく絡み合う”のか」

本研究の成果として、以下の二点が挙げられる。

一つ目は、「バランスに悩む＝ダメな保育」ではないということである。保育は数値化できるものでもなければ、明確な位置付けが存在するものでもない。そもそも教師が悩んで揺れ動くことこそが保育の本質なのではないかということに改めて実感した。教師の力量がないから幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つ教育について悩んだり、迷ったりするわけでもない。寄せられた事例を作成した教師は、経験が浅い人もいれば、長年保育に携わる人もいて、様々な年代の教師がバランスに悩みながら保育を行っているということが分かった。保育経験が豊富になれば悩むことがなくなるということではないのだ。また、事例の中では、どの教師も悩みながら、より良い保育を目指して幼児の思いを捉えようと努力したり、いろいろな援助を試したり、自分の保育を振り返ってこれからどうしようかと考えを巡らせたりしていた。それらの事例を読み進め、分析していくと、「保育というものは、常に幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つ教育について悩み続けるものなのではないか」、「そこに明確な答えはなく、大切なのは“自分の保育は幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合っているか”と振り返り、考え、実践につなげていくことなのではないか」という結論に達した。

二つ目は、「この研究の意義」である。当初は、幼児の主体性と教師の意図はバランスがとれるものであり、事例を分析、整理し、成果物を全国に発信すればバランスのとれた保育が展開されるのではないかと考えていた。しかし、この研究はそのような性質のものではないのではないかと考えに至った。「そもそもバランスのとれた保育とは何だろう？そのようなものが存在するのか？」という思いから、幼児期の環境を通じた教育は、幼児の主体性と教師の意図のバランスをとるというのではなく、幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つものであるということに改めて確認した。また、「幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つ教育はこれである」という明確な答えがないため、この研究でそれを提示することは難しいということも改めて確認した。悩みの背景や要因を示すことはできても、それらを完全に排除することはできないため、結局、うまく折り合いをつけながら幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つ教育を意識して保育を行っていくしかないのではないだろうか。また、時には幼児の主体性が強く出るときや教師の意図が強く出るときがあってもいいのではないか。大切なのは、目の前の幼児を理解する努力をすること、そして、自分が行った保育を振り返り、次の実践につなげていくということではないだろうか。そうであるならば、この研究は、集まった事例を読むことで「みんな同じなのだ」と共感したり、「自分も頑張ろう」と励まされたり、「自分だったらどうするだろう？」と考えたりすることに意義があるのではないだろうか。そして、今回の事例の作成をするときに依頼したように「これからどうするか」を園全体で話し合い、次への動力としていくことがとても大切なのではないかと結論に至った。

そこで、各園で話し合われた「これからどうしたい？【改善】」の欄に挙げられた、各園の思いをまとめて第2節でお伝えすることとする。

第2節 今後の展望「これからどうしたい？」

事例の「これからどうしたい?【改善】」の欄は、事例作成者の悩みの部分を園全体で話し合い、悩みを共有したり、今後の保育について考えたりするきっかけとなればと思い作成を依頼した部分である。その欄には、各園で話し合われた「幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合った教育」を行うためにこれからどうしていきたいかが詳しく書かれていた。そこから読み取ったこと、よりよい保育のための鍵となる言葉を以下に挙げる。

まず、一つ目は「幼児理解の大切さ」である。同じ遊びをしているように見えても幼児一人一人の楽しみ方は異なることや幼児と教師でも遊びの魅力的な部分が異なることから、幼児が何を楽しんでいるのか、どのような思いをもって遊んでいるのかを捉えていきたいという園が多くあった。そして、幼児の思いや何をイメージしているのか、どのようなことを楽しんでいるのかを捉えていくために、幼児の表情やつぶやきから読み取ったり、対話を通して幼児の内面を探ったりしていきたいということだった。幼児の思いを捉える目を養っていくこと、理解したつもりになるのではなく、バランスを意識したときには幼児の姿から思いを捉え直すことも必要であることの大切さを改めて感じた。

二つ目は「保育の心もち」である。その後の保育や行事等を見据えて環境構成をしたり援助したりする中で、これまでの経験や「こうでなくてはならない」という考えにとらわれ過ぎず、柔軟性をもって保育を展開していきたいという園が多くあった。幼児が主体性をもって遊びを進めていくためには、幼児理解を深めた上で、時には臨機応変に環境を再構成したり、援助の方法を変えたりしていくことが求められるのではないだろうか。また、「丁寧に」という言葉も多く見られた。幼児の思いを捉えるとき、幼児に関わるときには、「焦らず」「丁寧に」と考えている園が多かった。限りある時間の中でも、丁寧に幼児の思いを捉えたり、関わったりすることが大切であると考えられる。

三つ目は、「幼児の思いに寄り添って共に考えていくことの大切さ」である。教師が仲間の一員となり、幼児と一緒に遊ぶことで分かる思い、感じられる楽しさ、難しさがある。どのようにするとより楽しめるか、思いを実現できるかを一緒に考えたり、どうすると解決できるかを一緒に悩んだりすることが、幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合う教育には必要なのではないだろうか。さらに、教師自身の思いも大切にしていきたいという園もあった。幼児の思いに寄り添い、受け止め、安心感をもって遊ぶことができるようにすることはもちろん大切であるが、教師も思いを伝えていくことが大切である。それが、共に考えるということではないだろうか。

四つ目は、「教師同士での相談」である。「教師同士での対話」「語り合い、全職員で保育の方向性を確認し合うこと」「教師同士でカンファレンスを丁寧にやること」を大切にしたいという園もあった。さらに、事例の中には、悩むことが当たり前と書かれているものもあった。悩むことが当たり前だということを前提に、個人で自身の保育を振り返ることも大切であり、そこから園全体でも振り返りを共有し、次の保育につなげていくことも大切であることが分かる。悩む教師こそ、幼児の思いに気づき、寄り添うことのできる教師なのではないだろうか。多面的な視点で幼児をしっかりと捉えるためにも、教師同士相談し合い、幼児の実態や保育の悩みを共有することを大切にしたい。また、園全体で共有することで「今後の保育が楽しみになった」と書かれている事例もあった。幼児は人と人との触れ合いの中で育っていく。幼児と教師が共に考え、遊びや生活をよりよいものにしていくのと同じように、職員同士も対話をし、共に考え、悩みや迷いを前向きに捉えて実践していくことこそが「幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合う教育」なのではないだろうか。

第3節 本調査研究におけるまとめ

本調査研究において、各園から幼児の主体性と教師の意図のバランスについての様々な「悩み」や「迷い」が寄せられた。そこに、教師の経歴や地域による差はなく、皆同じようなことで悩み、迷っていることが分かった。また、それらを分析する中で、悩みや迷いが生じる背景も明らかになり、幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つ教育とはどういうものなのかが見えてきた。

幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つ教育を行うためには、教師が幼児の育ちの姿をイメージしながら、意図やねらいをもって環境を構成し保育を行う中で幼児理解に努めること、そして、幼児の思いを尊重し、寄り添いながら柔軟に保育を展開することが必要だと考えられる。このことは、第1章の中で津金先生が「活動の主体は子ども、保育者は活動が生まれやすく展開しやすいように意図をもって環境(物的・人的・空間的な環境)を構成していかなければなりません」と述べられていることと共通する。

まず、幼児理解のためには、幼児のつぶやきに耳を傾け、表情や行動から思いを捉えることが大切である。そのためには、教師が幼児と共に遊びを楽しみ、幼児が何に興味をもっているのか、遊びのどこに楽しさを感じているのかを間近で感じる必要があると考える。幼児の思いや遊びの楽しさ、難しさなどに寄り添ったり共感したりすることで、信頼関係が生まれる。幼児と教師が互いに思いを表現し合うことで、幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合った保育を行うことができるのではないだろうか。

次に、柔軟に保育を展開するためには、幼児理解によって捉えた興味関心などから指導計画を立て、環境構成を行うことが大切である。一人一人の幼児の思いを捉え、様々な展開を想定し環境を整えること、また幼児と共に遊びを進める中で必要なものを考えたり、環境を再構成したりすることが求められると考える。様々な展開を想定しておくことで、幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合った保育を行うことができるのではないだろうか。

しかしながら、保育は人と人との触れ合いの中で行われていくものである。幼児と教師の思いがぴったりと重なり合うこともあれば、思いがすれ違ったり、幼児の思いを十分に捉えることができなかつたりすることもあるだろう。だからこそ、日々保育を行う中で幼児の思いや言動を理解しようとする、保育を振り返り、幼児の思いに気付こうとすることが大事であり、「悩み」や「迷い」をもつことは、幼児の思いに寄り添おうとしている教師として素晴らしい姿と言えるのではないだろうか。また、津金先生も「時には、子どもの思いとのすれ違いに戸惑うこともありますが、どのように折り合いをつけるか模索する中で、子どもとの関係性も深まることもあります」と述べている。保育への「悩み」や「迷い」をそのままにせず、振り返って考えたり、教師間や園全体で共有したり、課題解決のために相談し合ったりすることで、幼児の育ちを支える教師と幼児の関係性が深まっていくと考える。



(参考資料) 幼児の主体性と教師の意図のバランスに悩んだ事例一覧表

学年	時期	場面	事例タイトル
3歳児	4月下旬から6月中旬	ごっこ遊び	楽しいよね。でも、安全面は？
	6月中旬	自然との関わり	葉っぱを摘む遊びから離れてほしいけれど
	6月中旬から7月上旬	水遊び	Aくんも一緒に水遊び楽しんでほしいな
	6月下旬	学級全体で行う活動	「ぼく、やらへん」って、どうして？
	6月下旬	片付け・学級全体で行う活動	クラスの友達と遊ぶ楽しさを感じてほしい
	7月	自然との関わり	生き物を大切にしてほしい
	7月上旬	友達との関わり	こういうことだよね…けどその言い方は
	7月中旬	自然との関わり	色水遊びに、アサガオの花も使ってほしいな
	10月上旬	運動会に向けた取組	今はこれをやってほしいんだけど…
	1月下旬	学級全体で行う活動	鬼ごっこは楽しいんだけどなあ
4歳児	4月	学級全体で行う活動	いつか保育室に帰ってくるはず
	4月下旬	自然との関わり・話し合い	いちごより、トマトの方がみんなで食べられるなあ
	4月下旬から6月上旬	製作活動	やりたくない気持ちもわかるけど、これならやれそうかな。
	5月上旬	異年齢交流	友達の思いも受け止めてほしい、でも壊されたくないのも分かる
	5月中旬	砂泥遊び	何をイメージしているのかな
	5月中旬から下旬	砂泥遊び	土や水の量を変えたら、もっと面白くなると思ったけれど
	5月下旬	製作活動	「自分でできた！」を味わってほしい
	5月下旬	砂泥遊び	川のようになったことを知らせたい
	6月	遊びを探す	その子のやりたいことって何？～見守ることときっかけづくりの葛藤～
	6月	ごっこ遊び	なんで逆？
	6月上旬	ごっこ遊び	おまつりごっこ、どうしたら広がるかな？
	6月上旬	ボール遊び	これって、ポウリング？
	6月上旬	製作活動・ごっこ遊び	お店ができたね！どうしたらもっとお客さんがきてくれるかな
	6月下旬	砂泥遊び	思いを実現してほしいけれど、子供の気付きや試行錯誤も大切にしたい
	6月下旬	自然との関わり	今ある環境の中で自分なりに工夫をして虫探しを楽しんでほしいな
	7月上旬	感触遊び	どうしたら続けて遊べるかな
	10月上旬	学級全体で行う活動	「みんなと一緒に」の楽しさも感じてほしいけれど
11月	話し合い	もって帰るのもいいけれど	
5歳児	5月30日	話し合い・運動会に向けた取組	話し合いの中で、教師の思いが強くなりすぎたのかもかもしれない
	6月	ビー玉コースづくり	新しいコースをつくらない？
	6月5日	ごっこ遊び	お店屋さん どうする？
	6月6日	友達との関わり	ジャグどうしよう
	6月上旬	ごっこ遊び	やりたい！って言っていたのに、..
	6月上旬	ごっこ遊び	友達と一緒に遊びを発展させてほしい
	6月中旬	ごっこ遊び	暇って言わないで
	6月中旬	ごっこ遊び	このままじゃ危ないよ
	6月中旬	ごっこ遊び	“ちゃんと” たたかわないと面白くないし、修行にならない！確かにそうだけど・・・
	6月中旬	水遊び	どうしたら安心してプール遊びをすることができるだろう
	6月下旬	ごっこ遊び	ここまでやってしまっただけよかったのかな
	6月下旬	友達との関わり	しっほりも楽しんでほしいな
	6月下旬	製作活動	みんなが乗れる大きな舟をつくらうよ
	7月上旬	製作活動・ごっこ遊び	たくさんつくったジュースで、何して遊ぼうか？
	7月上旬	自然との関わり・話し合い	せんせい、何を言わせたいの？って、子どもに思わせてる！？
	7月上旬	自然との関わり	そうだよ、捕りたいよね
	7月上旬	水遊び	待ってあげたいけど、友達の気持ちにも気付いて。どう思ってる？
	8月中旬	製作活動・ごっこ遊び	とっても楽しそうなお化け屋敷！できるなら皆で楽しみたい
	9月	運動会に向けた取組	一人一回アンカーをするっていうのはどうかな。
	9月下旬	運動会に向けた取組	赤グループさん、だいじょうぶ？
	10月	運動会に向けた取組	どんな運動会にしたい？
10月中旬	ごっこ遊び	アスレチック遊び～みんなが頑張ってきたアスレチックに招待しようね～	

※ 各事例は、右の QR コードから見ることができます。



研究実行委員

高 田 敏 彦	長崎大学教育学部附属幼稚園 園長
小 林 真 実	長崎大学教育学部附属幼稚園 教頭
森 奈津子	長崎大学教育学部附属幼稚園 教諭
森 田 遥	長崎大学教育学部附属幼稚園 教諭
濱 田 奈々	長崎大学教育学部附属幼稚園 教諭
亀 井 凧 紗	長崎大学教育学部附属幼稚園 教諭
木 部 里 美	福岡教育大学附属幼稚園 園長
岩 永 圭 子	佐賀大学教育学部附属幼稚園 園長
鈴 木 麻 子	熊本大学教育学部附属幼稚園 園長
佐 藤 努	大分大学教育学部附属幼稚園 園長
高 橋 京 子	宮崎大学教育学部附属幼稚園 園長
大 田 高 行	鹿児島大学教育学部附属幼稚園 園長

研究協力者

津 金 美智子	名古屋学芸大学 教授
門 田 理 世	西南学院大学 教授
脇 信 明	長崎大学教育学部 幼児教育コース 准教授
小 西 祐 馬	長崎大学教育学部 幼児教育コース 准教授
森 野 美 央	長崎大学教育学部 幼児教育コース 准教授
室 野 亜津子	長崎県幼児教育センター センター長

謝 辞

最後に、熊本大学教育学部附属幼稚園幼児教育研究会で御講演くださった名古屋学芸大学教授・津金美智子先生、佐賀大学教育学部附属幼稚園公開保育研究会で御講演くださった西南学院大学教授・門田理世先生、そして、貴重な事例をお寄せいただいた全国国立大学附属幼稚園各園の皆様方に深く感謝申し上げます。

令和6年度 文部科学省委託「幼児教育の学び強化事業」

遊びにおける幼児の主体性と教師の意図のバランスに関する研究

発行日：令和7年3月31日

国立大学法人 長崎大学教育学部附属幼稚園 〒852-8131 長崎県長崎市文教町4番23号

協 力：全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

